

PSN-11 西ヨーロッパ諸都市の河川に架かる橋梁の景観

中部大学・工学部 正員 塩 見 弘 幸

1. はじめに

歴史と伝統を持つヨーロッパの橋梁は、景観上からもしばしば紹介されるが、主としてそれは長大橋や特に眼をひくデザインの橋に限られ、一般的な橋に関する情報は案外少ないように思われる。平成元年夏、西ヨーロッパを旅行し、特に観点を橋梁の美観・景観のみにしぼって視察および資料の収集を行った。この報告は、視察した橋梁について、景観上特色があると思われる幾つかについて述べたものであるが、彼の地を旅行した人にとっては、既によく知られた内容のものもあることであろう。

2. 視察の対象

第一回として、車を使用し20日間の日程内で視察可能なコースを設定し、その路線の6ヶ国（イタリア、オーストリア、スイス、西ドイツ、ベルギー、フランス）の21都市を訪れた。視察の対象を都心近くを流れる河川や運河に架かる橋梁に限り、200橋近くを踏査した。現地では写真撮影による資料収集を行ったが、撮影地点として特殊な場所を選ばず、文献1と同じ基準とした。

3. 景観上の特色とその代表例

3. 1 周囲との調和 a) 橋梁を控え目にして周囲の建物や観光資源を目立たせた例（写真群1）

ウィーン・ドナウ運河に架かる一連の橋梁は、主に1940年代以降に架けられたもので、単純なアーチ橋や曲線をもったラーメンの上路橋である。また、鋼橋の色彩は暗い緑とか青系統のため、河川に沿った歩道上から眺めたとき、橋の存在は目立たない。さらに歩道に沿った車道の河川側は少し盛り上がっていたり、植樹帯があるなどして、車道から橋への眺望は遮られることが多く、自ずと視線は建物へと移る。ザルツブルグ・ザルザッハ川の左岸の小高い丘に、ホーエンザルツブルグ城が威容を誇っている。この麓を中心に3本の歩道橋と2本の道路橋が架かっているが、いずれもウィーンの例のように単純な形式と抑えた色調のため、城やその下に点在する教会の建物の景観を壊さない。チューリッヒ・リマット川に架かるQuai橋も聖母院の高くそびえる尖塔を引き立たせている。

b) 橋梁の材料・形・色彩などを周囲に合わせ、橋梁自体も目立たせた例（写真群2） ローマ・テベレ川やフィレンツェ・アルノ川に架かる石造アーチ橋の材料や色彩は周囲の建物と同じものが多いため、建築物と橋梁の一体感が特色であろう。デュッセルドルフ・ライン川に架かるRheinknie橋の斜張橋中央の塔と、そのすぐ上流右岸の180mの高さをもつライントワーとの位置関係が、見る者の移動に連れて刻々と変化をし、眼を楽しませてくれる。ケルン・ライン川に架かるHohenzollern橋は鋼アーチの鉄道橋で丸みを帯びている。それに対する大聖堂は、大きな二つの尖塔をもつ建築物であるが、その重厚さと色調の点でバランスがとれていて両者とも引き立っている。

3. 2 対親水性（写真群3） 川岸に沿って公園や歩道を設けている都市は多い。その中でもウィーン・ドナウ運河、バゼール・ライン川、フランクフルト・マイン川、パリ・セヌ川等には、幅員の広い歩道が長く続いている。これらの河川に架かる橋は船を通し歩道をも跨いでいるが、特にウィーンのそれらは、技術的な必然性からであろうが、歩道と水辺との境界に橋脚を設けている。このために水辺空間とは一時縁が切られた歩道空間が形成され、ここを通り抜けることによってさらに展開する風景に期待を抱かせてくれる。後の3都市の橋梁も同じ特色をもっているといえるが、鋼橋に関しては必ずしもそうとは云えない。また橋の下を中心として公園が設けられている場合がある。このようなところでは橋梁の歩道部と公園とを結ぶ階段が取り付けられていることが多い。

3. 3 アーチが特に目立っている例（写真群4） 今回視察した橋にはアーチ橋が多い。その中で石造アーチのローマ・テベレ川に架かる3橋（Matteotti橋、Fabricio橋、Aventino Sublicio橋）や、

パリ・セーヌ川のAusteritz橋は、弧の部分とその他の部分とで色彩の異なる石材を用いて、ことさらアーチを強調している。同川のBercy橋は、上が鉄道橋で下が道路橋の2重構造で、古代の水道橋のように、スパンの異なるアーチを重ねて造形の妙を発揮している。また、同川のMirabeau橋はトラスのアーチ橋であるが、アーチを構成している下弦材のウェブ高さを微妙に変化させた変断面のため、1本のけたで2本の異なったアーチが優美な弧を描いている。パリ・サンマルタン運河に架かる歩道橋はその下に船を通す関係上、日本の太鼓橋のようにライズ比の大きいアーチ橋であるため、その造形美が愛でられ最近のテレビコマーシャルにも使用されている。ベルン・アーレ川に架かる鋼アーチのKornhaus橋は旧市街地をも跨いでいる。旧市街地から見上げると威圧感を受けるが、少し離れて眺めると、新市街地の家並と程良く調和していて、スパン長は約128mであるが、それよりもスケールの大きなゆったりした感じの橋に見える。同じ川に架かるNyegg橋からは、あたかも大きな半円が開けられた石の額縁がそこに存在するかの印象を受ける。

3. 4 統一した美しさの例(写真群5) ストラスブール・イル川は川幅が20~30m程度の小さな川である。そこに架かる石造アーチ橋の幾つかは、同じ色の石材が使用され類似の形をしているので、注意深く眺めないと、それらの相違点に気付かない。街並に緑の多いこともあって、川辺に沿っての散策が楽しくなる。ケルン・ライン川に架かるDeutzer橋には、2本の桁が並んで架けられている。最初に鋼箱桁橋が架けられ、11年後の1979年に上流側にこれと全く同じ形状・寸法のライトウエイトコンクリートを用いたPC箱桁橋が密接して架けられた。予備知識がないと、側面から眺めただけではこの相違には気付かないであろう。この橋の約600m下流に先に述べたHohenzollern橋がある。鉄道線の増設のため、既設の2本の鋼アーチ橋を並べたところへ密接して、これと形状・寸法・材料・色彩の全く同じアーチ橋をもう1橋並べて架けている。調査当時はこのことに気付かず、単に既設橋梁の塗装工事との印象を受けた。帰国後、大聖堂から撮した6年前と今回との写真を見比べて判った。

3. 5 橋梁の一部を装飾した例(写真群6) 親柱や高欄に彫像を取り付けた例は多いが、ローマ・テベレ川に架かるVitorio Emantele橋の高欄の石造彫刻は特に巨大で、周囲の建物を背景として眺めても、実に堂々としている。先に述べたHohenzollern橋の歩道部分の親柱の騎馬像も大きく、ケルンの大聖堂や橋自体を背景として眺めてもその雄大さは劣らない。彫像が桁や橋脚に飾られている場合もある。パリ・セーヌ川に数橋見られるが、遊覧船からの眺めが楽しい。リエージュ・ミューズ川にも1橋ある。これらは守護神の役目を果たしているのだろうか。高欄のデザインにも工夫を凝らしたものが多いが、ルツェルン・ロイス川に架かるRathaus歩道橋の高欄は非常に繊細な感じを与えている。

3. 6 屋根のある橋(写真群7) 専ら観光用として利用されているので一般の人々にもよく知られている。すべて歩道橋である。ルツェルン・ロイス川に2橋(Kapel橋, Spreuer橋)、ヴェニス・グランデ運河のRialto橋、フィレンツェ・アルノ川のVecchio橋、インスブルック・イン川にも1橋見られる。中世には橋上に教会が建てられていたものが数多くあったと記されている²⁾。バゼル・ライン川のMittlere Rhein橋の中央の小さな塔はその名残であろうか。

3. 7 その他(写真群8) チューリッヒ・リマット川のRathaus橋は、橋長約50mに対し、幅員が54mでこの近辺のどの橋よりも広く、歩道橋というよりヴァイン広場の一角をなしている。橋上には簡易な店舗も出されている。パリ・セーヌ川のArts歩道橋はユニークな形のアーチ橋である。ことさら小さな部材断面を用い、主構の数を多くし繊細な感じを出している。ルツェルン・ロイス川のReuss歩道橋はダブルワレントラスの主構をもつが、主構と主構との間が何かで遮られているのか、側方から見ると片側の主構のみが浮き出て見え、トラスの幾何学模様が装飾的に生かされている。

〔参考文献〕 1)塩見弘幸・菊池洋一「小規模橋梁に関する景観設計について—名古屋市堀川に架かる橋梁を例として—」橋梁と基礎, Vol. 23, No. 3, 1989, PP. 27-33. 2)川田忠樹監修「歴史と伝説にみる橋」建設図書, 1986.

写真は数が多いので当日展示する